

『手紙』

2006年／日本／生野慈朗監督作品

兄弟と手紙と… 受任事件と重ね合わせて

会員 樋口 裕子 (63期)



『手紙』
ブルーレイ 4,935 円 (税込)
DVD スタンダード版 3,990 円 (税込)
発売元：ギャガ
販売元：日活
© 2006『手紙』製作委員会

この映画は、東野圭吾氏の同名小説を映画化したものである。

映画は、弟が受刑者である兄に宛てた手紙から始まる。「兄 貴、元気ですか？ これが最後の手紙です。……」。

兄（玉山鉄二さん）は、弟（山田孝之さん）を大学進学させるために、盗みに入った家で家人に見つかり、思わず殺してしまう。そして、強盗殺人の罪で服役する。弟は、犯罪者の弟であることを知られないように生活をしている。しかし、お笑い芸人を目指してがんばり、やっと夢が叶うときに、世間に兄の存在が知られてしまう。その結果、芸人の夢が消え、付き合っていた恋人との結婚も白紙に戻り、何もかも失ってしまう。そこで、弟は兄の存在から逃げようと、転居し転職する。弟は兄へ手紙を書くことも止めてしまう。このように兄の存在を打ち消そうとしても、そこでも兄の存在から逃げることはできず、差別を受ける。そして、そのときに社長に言われた言葉。「我々は君のことを差別しなきゃならないんだ。自分が罪を犯せば家族をも苦しめることになる。すべての犯罪者にそう思い知らせるためにもね。」。そして、同時に、差別を受ける中でも、兄の存在を知った上で自分に好意を寄せてくれる味方がいることを知る。その女性（沢尻エリカさん）は、弟が手紙を出さなくなってから、弟の振りをして兄に手紙を書き続けていた。そのことを知った弟は、理解してくれる人達とのつながりを一本一本増やしていこうと考える。そこで、その女性と結婚し、子供を授かる。しかし、

その差別は子供にも及ぶ。そこで、家族を守るために、兄を捨てることを決めた弟。

物語はこのような流れである。

東野作品に常連の山田孝之さんの憂いを帯びた演技が光る。また、沢尻エリカさんの直向な愛情を感じる演技も良い。

実は、このコラムの締切日に違う映画のコラムを提出していた。このコラムの提出日の次の日に出た判決直後に被告人と面会したことで、差し替えたのである。私が、受任した事件の被告人も、この話と同じく唯一の肉親は、兄弟だけだった。被疑者段階から、接見すると、兄弟のことを満面の笑みで話していた。ただ、二言目には、「迷惑をかけたくない」とも話していた。けれども、被告人は、勾留中に、兄弟に何度も手紙を出していた。そのことを、判決直後の面会で知ったときに、この映画を思い出したのである。

兄弟は、別の所帯を持つことが多く親子ほど繋がりは強くないし責任の度合いも異なる。しかし、夫婦のように縁を切ることのできない血の繋がりがあある。この映画は、単に加害者の家族の苦悩というだけでなく、このような兄弟の関係を最も感じられる物語である。

原作と映画は、弟の夢が歌手とお笑い芸人で異なる。その結果、ラストも異なっている。この点でも、原作を読まれた方も楽しめる映画だと思う。また、冒頭で桜を出すなど、刑務所のサクラの判子がイメージされており、活字（原作）と映像（映画）による違いも楽しめる作品だと思う。